

博士論文（要約）

「書き直すこと (rewriting)」としての翻訳と翻訳者の創造性：
大正・昭和初期の短篇小説翻訳を事例に

Translation as "Creative Rewriting" in Case Studies of English-Japanese
Short Story Translations in the Taisho and Early Showa Periods

中 川 映 里

I 論文の目的

本論文は、Translation Studies（以下、TS と表記）の理論や方法論を日本の文脈への応用可能性という観点から検討し、翻訳文学を正当に評価できる新しい翻訳批評の枠組みを提案することを目的とする。日本では翻訳文学の重要性が早くから認識され、文芸翻訳に対する一般の関心も高い。一方で、翻訳の評価の尺度としては、「直訳（逐語訳）・意訳（自由訳）」「原文尊重・訳文重視」といった曖昧な二項対立概念に頼る部分が多く、理論的な翻訳批評枠組みは形成されてこなかった。その結果、重要性が指摘されながらも、正当に評価されていない翻訳作品が少なくない。西欧に起源をもつ TS は、翻訳の理論と実践を幅広く研究対象とし、非西洋諸国にもその影響を拡大しながら発展を続けている。その研究成果は、翻訳についての学術的な議論に必要な理論的基盤を提供するが、これまでの日本における TS 理論の移入では、日本の翻訳文学への適用可能性を十分に検討しているとは言い難く、実質的には従来の曖昧な二項対立概念に代わる枠組みを提示するには至っていない。TS の議論が基本的に西洋の状況を前提としていることから、日本の事例への応用自体を疑問視する向きもあるが、TS でも非西洋諸国の視点に対する関心が高まっていることに加え、TS には多様な観点からの議論によって理論を構築、発展させてきたという日本の翻訳研究にはない強みがあり、日本には西洋の議論では扱われていないような翻訳事例が豊富に存在するという強みがあることから、両者には有意義な交渉が可能だと考えられる。すなわち、TS に理論的基盤を求めることによって日本の翻訳文学を学術的に議論するための切り口が得られると同時に、その研究成果を国際的に発信することで西洋の枠組みに組み込まれた無意識の偏向を暴き出したり、既存の議論をさらに発展させたり、新たな見方を提供したりする可能性が期待できる。このような考えから、本論文では TS の理論に基づく翻訳批評の枠組みを提案し、翻訳文学が正当に評価される仕組みの確立を目指す。

II 構成

本論文は序章、結章のほか、六章で構成されており、第一章と第二章を前半部、第三章から第六章を後半部と位置づける。前半部では、TS の理論と方法論の検討を通じて、日本の翻訳文学研究に有効な批評の枠組みを提案する。後半部では、前半部で提案した枠組みを実例に適用し、その有効性を具体的に示す。なお、日本の文脈にはさまざまな言語間の翻訳文学が存在するが、典型例の一つとして、本論文では英日翻訳を基準に議論を進める。

Ⅲ 各章の概要

序章

序章では、研究対象とする「翻訳文学」が文学として受容され、文学として機能する翻訳作品であることを確認し、翻訳文学に関わる二つのテキストについては、TS の用語を翻訳した「起点テキスト」「目標テキスト」という表現ではなく、「原作」「原文」「翻訳（作品）」「訳文」という従来の表現を用いて示すことの妥当性を論ずる。その上で、上述の問題意識と本論文の目的を表明する。

第1章 翻訳文学研究の理論的基盤：翻訳と翻訳者の意味づけ

第一章では、はじめに本論文の目指す翻訳文学批評のあり方を論じ、関心の所在を明確にする。翻訳文学には、それ自体が自律性を有した作品であるという側面と、特定可能な原作が存在するという側面がある。これまでの批評では後者に重点が置かれ、原作との関係性が議論の中心であったが、翻訳文学が文学として受容されるという現実に鑑みれば、前者の側面も同様に重視されるべきである。また、原作との関係性についても、原文テキストの解釈自体が読者によって異なることを考慮すれば、理論的にも現実的にも実現不可能な「等価性」を判断の基準とするのではなく、翻訳者による原文解釈の根拠や正当性、訳文で再現されている要素の選択と表現手法の妥当性を分析、評価すべきである。このような翻訳批評のあり方を理論的に支える翻訳概念を TS の知見に求める。TS で暗黙の前提となっている西洋の状況と日本の文脈の相違を確認した後、すでに日本の翻訳文学研究に応用されているポリシステム論やスコpos理論の利点と限界を論じる。その上で、翻訳を「書き直すこと (rewriting)」と捉えるルフェーヴル (André Lefevere) の理論の有効性を主張する。翻訳を「書き直すこと」と捉えることによって、「書き手」としての翻訳者が前景化され、近年 TS で関心の高まっている翻訳者の創造性という概念が導かれる。翻訳者の創造性が原文を解釈する段階とその解釈を表現する段階の双方で認められるという議論から、本論文の関心の中心にある翻訳者による解釈と表現は、翻訳者の創造性の問題として論ずることができることを示す。さらに、制約が創造性を高めるという考え方をもとに、西洋語から日本語へ翻訳する翻訳者には豊かな創造性が求められることを主張する。

第2章 翻訳文学研究の方法論

第二章では、具体的な批評の方法を検討する。まず、翻訳文学の文学性を重視した批評の方法を

提案したものとしてベルマン（Antoine Berman）の生産的翻訳批評を参照する。ベルマンの議論を基盤に、翻訳者に関する予備的研究とテキスト分析によって翻訳者の意図を読み取り、その意図に従って個別の処理の妥当性を検討すること、訳文内部に一貫性を見出して作品の方向性を明らかにすること、さらに訳文における表現上の工夫を指摘することが分析の中心的な課題であることを示す。テキスト分析から翻訳者の意図を読み取る方法としては、翻訳過程における翻訳者の選択のパターンを見出すというマルムケアの翻訳文体論の方法が有効である。また、テキスト分析とその記述に有用な枠組みとして、翻訳手法の分類表と創作文体論のリストを提示する。評価に際しては、作品としての一貫性を備えた文学テキストとして成立していることを重視し、受容文化における役割、影響力も考慮されるべき要素であると主張する。

第3章 短篇小説ジャンルと翻訳

第三章では、前半部で提起した考え方と分析評価方法の有効性を示す事例として、大正・昭和初期の短篇小説翻訳を取り上げる根拠と意義を示すために、短篇小説ジャンルの固有性と、日本におけるジャンル概念生成と翻訳文学の関わりを確認する。まず、短篇小説というジャンルが詩に近い性質を持ち、さまざまな文学的要素が作品の形成に重要な役割を担っているため、翻訳に際しては翻訳者に豊かな創造性が求められる形式であるということを示す。一方で、そうした認識が不足しているために、翻訳研究において十分な議論がなされていない状況を指摘し、本論文で研究対象として取り上げる意義を主張する。さらに、翻訳文学が隆盛を迎えたと言われる大正から昭和初期にかけて、日本で短篇小説ジャンルへの関心が高まり、ジャンル概念の生成に翻訳文学も重要な役割を果たしたことを確認し、創造力に富む翻訳者による評価されるべき翻訳事例が見出されることを示す。本章で詳らかにする大正・昭和初期の短篇ジャンル展開の様相は、事例研究対象の翻訳者と翻訳作品が位置する歴史的な脈であり、翻訳分析の予備的考察の役割も果たす。

第4章 芥川龍之介の短篇小説翻訳

第四章では、第三章で示した文脈において重要と考えられる事例の一つ、芥川龍之介によるイェイツの短篇小説の翻訳、「春の心臓」を取り上げる。第二章で議論した方法に基づいて分析を行い、芥川が卓抜な文章構成力と表現力によって、原文の修辞技巧をすぐれた日本語表現で再現し、原文の骨格である対比構造を再構築するとともに、原文の詩的な趣を訳文でも実現していることを明らかにする。原文の意味内容だけでなく、短篇小説において重要な要素である作品構造や修

辞的効果を重視した芥川の翻訳作法は、短篇小説翻訳のあり方を示す貴重な事例としても評価される。一方で、語彙選択に見出されるパターンから二人の登場人物に原作とは異なる関係性を付与していることを指摘し、翻訳者の意図を読み取って、訳文の論理で処理の妥当性を判断することの重要性を強調する。芥川の翻訳事例は、本論文の枠組みが翻訳作品の理解と評価に有効であることを具体的に示すのみならず、分析結果が芥川研究や文学研究にも示唆を与えるものと期待される。

第5章 大正・昭和初期のアンブローズ・ビアス：受容の様相

第五章と第六章の事例研究では、芥川の外国文学紹介者としての側面に光をあて、大正・昭和初期のアンブローズ・ビアスの翻訳作品を取り上げる。第五章では、戦前の翻訳書誌が把握されていない状況に鑑み、翻訳分析の予備的研究として、大正昭和初期のビアス受容の様相を詳らかにし、芥川の紹介言説が翻訳作品の選定や翻訳のあり方にも影響を及ぼしていることを指摘する。

第6章 大正・昭和初期のアンブローズ・ビアス：翻訳分析

第六章の翻訳分析ではまず、岡本綺堂訳「妖物」が怪談作品として仕立て上げるという意図のもとに巧みに書き直されていることを明らかにする。綺堂訳の分析を通じて、翻訳者の意図や訳文内部の論理に注目することによって個別の処理の意義を正しく理解できることを示すと同時に、翻訳文学が翻訳者の創造性の産物であることを改めて強調する。さらに、作品の方向性を明らかにすることで、再翻訳への有益な示唆ができることを示す。次の翻訳分析では、雑誌『新青年』の翻訳者、浅野玄府と、英文学者の西川正身の翻訳を比較検討することを通じて、従来の翻訳批評に潜む偏向を暴き出し、翻訳者の創造性こそが評価されるべきであることを強く主張する。

結章

結章では、議論の展開を確認した後、本論文の提案する枠組みが日本の翻訳研究に寄与するのみならず、国際的な議論へ貢献する可能性を拓けることを論じる。同時に、翻訳文学の豊かな発展には翻訳者と翻訳作品が正當に評価される仕組みが不可欠であることを示し、本論文の枠組みはそうした仕組みの確固たる土台となることを主張する。